



至從心得草後編  
上

9  
3457  
3



3457  
3

主持ぬ身ハ公安き杯思へるハ大ひあるに事あり也。人としてまろく君臣の位なき者一人もなし。國一郡の主ハ天への奉る也。其下ハ住者の皆家来也。父ハ猶那も老く。女房子供ハ家人也。亦先祖ハ主人も老く。子孫ハ家来也。其家の一代くハ亦先祖より番頭を仰せ有るまろく。臣の職をよく勤く。一切の敗實を子孫へ送るべし。

平かふ

# 主從心得草後編

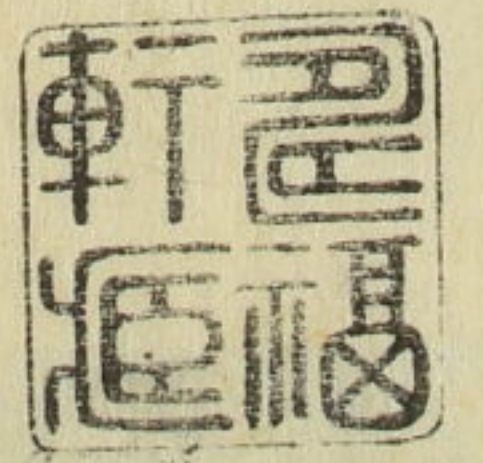
上下二冊

繪入

東都下谷金杉

天保十四卯七月

壽福軒述



## 自序

イッパ

○此本の奉る人の有増をあるも。大間違ひの所ハ其道不  
か。こき入補ひぬ。又年季奉る御仕着漸といふ本壹  
冊の芝取取らり。又取らる所らり。丸小用ひご。其  
本の趣意を以て。十八丁迄あるも。其餘の拙が見聞の事  
をあるも。文字假名遣ひ等の相違ハあげとかぞへご。又  
又道理ハ當ぬ事も多あるべし。是ハ遠國より今参りの人  
近郷ハ這出の丁稚飯焚の者。其語り聞せ。前車のろろ  
かへるを見。後車のい。めとせんが為也。其外を思ふ。此  
此門の和等達の已披見。他輩の披見をゆるす。

正統心得 二編上

○學記ふいまう。玉琢うごまむ器とあらむ。入學むごまむ。道をあらむとあり。道を知らむとあらむ。行ひがじ道をあらむと居らむとあり。況やあらむとあらむ。猶く行ひがじ。よき道をあらむ。よき行ひをいふこと。福德安公の田地。入到る事疑ひか。たとひ何本をよむ。我身の脩め。家を齊へる處の急所をいふ留とよむべし。命を其急所。みかを舟とよむ人。只輕口の面白き所を好む人多し。是れ作者の本意あり。作者の本意。身をよく脩め家を齊へるよき事あり。是を取て以て行かんとする人。かじき者也。何本をよむ。我身の爲め事

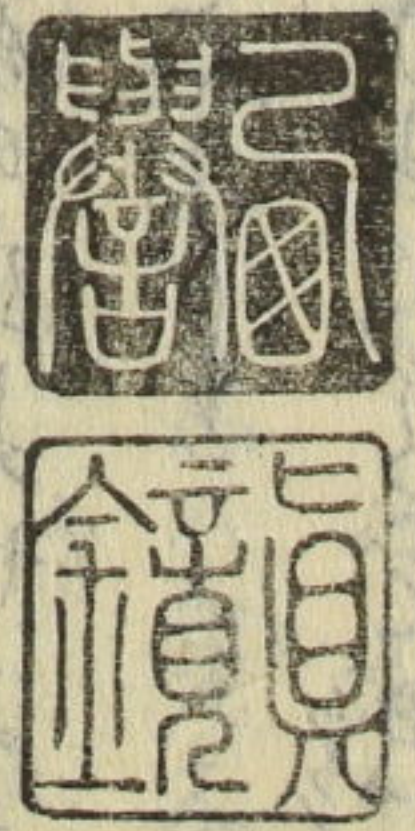
を考へ出さん。爲也。聖經諸子百家の書ハ。及む。假名本に至る迄。皆身を治め家を齊へんが爲の道具也。よき道をあらむ。此世を安んずるべし。○此本の主従といへ。主従の事。むらり。愚人の様々の事あり。といふ人あり。夫は間遠也。拙も主従の事。むらり。認む。けむ。夫はよき理屈むらり。いふ。愚人の退屈。夫はよき。よき。よき。時。かき。詮。是れ愚人。むらり。いふ。よき。本。子。を。愚人のよむ。よき。た。の。かり。夫。故。口。の。事。保。町人百姓。本を讀む。主従の事をよくあらむ。又三へん。主従心得。舟と秘

事口傳の事は是が見と篤と動入へり。人とまて人を  
 使ひ人仕する事を知らざらんむよき人とならひはじ。  
 是より何れと。主従の事よりよく心得ざらんむはる心あらず。  
 身を脩め家を齊へるの根本也深く考ふべし。

天保十三寅歲四月天赦日

東都下谷金杉

壽福軒真鏡述



上之巻目錄

- 一 幼少の時奉々出るふ三ツの品ある事 四丁
- 一 檀那といふ文字のかう者やく 十一
- 一 奉々出るふ喜樂愁の三ツある事 十二
- 一 奉々入るふ三ツの不思儀ある事 十六
- 一 短冊紙や色紙虎屋の五種香賣の事 二十
- 一 いづまの家もあまのけ者よんむとく者よき事 廿四
- 一 若ひ者六歌仙飛上るきらくの風の事 廿五
- 一 主人に向ひうそ傷りをいふ女の油断すべからむとの事 廿八
- 一 村田一統大店向月入へん宛旋をよきかせる事 廿九

- 一 江州勢列等の國くより奉々み出る事 三十二
- 一 奉々をよくとめ番頭とあり中登りする事 三十五
- 一 一切の奉々人衆遠方の東都へ何者も来るといふ事 三十七
- 一 八瀬大原等の乳吞子育る事 三十九
- 一 親の子の悪をあらぬ事司馬温公家訓の事 四十四
- 一 神主の子息神勅と偽りて親父をたむかる事 四十八
- 一 今の世の魚川つらゆりも老み女房といふ事 五十
- 一 今時のかみ我手みまむらりかるといふ事 五十一
- 一 出来合の夫婦因縁いふ事古事来歴の事 五十四
- 一 目ふつといふ事女房今ハ鼻ふつきと公のかろる事 五十七

主従心得草 後編上

初少の時奉々み出ると三ツの品あり事

○一ツふの親貪鈍志て養育する事一ふりかく是非かく奉々み出するあり。是ハ親の爲我身の爲の事也。二ツふの家貪しから孫玄兄弟を多く志て未くをうく志き。三ツふの何一もふけまをまふ物。是ハ我身の爲也。三ツふの何一不足のふけまを。親のえむり不置てハ憂ひつゝい事一をまらむ。人のふんぎの思ひかりがふいふ。其家のほとあり一時人をひ等も行届らむ其上おごりの心も物りのふし修行の爲ふ事なり。是ハ家の爲なり。











通不和とありも金は故小用ひやうのこつて大事ふり。極上くの寶ふと芸惡鋪用申の時甚く笑ひをふすりの也。金持たる人の善人ふても憾一きたふしと誹らるる者也。心得たふし。人ふも継ぐまこと。金をも万とためんと兩方よきやうふらゆるぬ者也。可愛がくまこと貪するより。憎まきても。そしらまきても。金持たる方が勝也。まこと芸智志也。覺ふてハ。金はたまゆるぬ者也。金ためるふら口傳わり信の一字也。一字まへをふさず守りふかけて居る時ハ。金銀も自然とたまりて惡事災難を除き。人ふよく用ひらま。何ふても足る事叶とがとり小事ふし。人間一生ハ信の字

さへ持て居まを。まきまむと志て忠孝をふし。威ふく志て諸人敬ふ。人間一生ハ勿論天地の間ハ。信の一字ふく志てハ。万物調ひがこし。仁義禮智信の五常也。信の一字ふき時ハ。仁も足へ不るとあり。義も志やちこなるふ似て。徳もけひまくとあり。智も貪欲うぬまことあり。

木 火 金 水 地  
仁 義 禮 智 信  
春 夏 秋 冬 土

人の人のいづく。仁まこと勇を失ひ。我まこと貪をする。終るまが危つういとあり。智まことかうとをつく。信まこと



別去て商家の奉る人の信の二字を首ふかひて。勤めさへ  
まををわしき奉るふき者也。夫奉るとい主人へ身を  
奉るとかひてまるとよむ。お前のかゝるふのくす。主人  
より頼りたるかゝる也。信ふき時の私の子来る者也。調市  
飯焚といへ。信の一字を待て居る時ハ。あまのりまらき奉  
はせぬ者也。まると人も私ををふとて。主人大事と勤る時ハ  
身ハゆきき奉るふく。心をくるまむる事ハもふく。一生  
安樂也。己まるとまふするまるとの破滅也。主人の爲ふ  
すのまると我身の爲とを得べし。君を思ふハ身を思ふと  
りふたとへの通り也。又檀那といふ文字ハ。主人一人の名ふ

ていふ。主人と家来と合せて檀那といふ。唐土の江甫と  
いふ所ハ。檀といふ木なり。此木の下ハ蔭といふ草なり。此草  
を取て外へ植ても育たむ。忽ち枯るふり。又檀の木も蔭の草  
ふき時ハ。是も又忽ち枯る也。右檀那をいふ所ハ。植まハ。両方ま  
榮へるふ。主従合せて檀那といふ也。主人といふ所の家来  
家来有ての主人也。又家来ふくてハ。主人と名有る者ふし  
様補正成公のまうふ心得たき者也。主従とハいふけ  
ま。主人家来を主人と思ふべし。この仰せ也。かやうふ持で  
ふくてハ大事の所用ふ立者ふし。此奉ハ主従三へん下の  
巻補の所阿部大藏の所をえて考ふ。又家来をい

何れこのやうに思ふ人の下よの大事の用ふた人ありし。  
孟子のいづく。君臣を視る事士族の如くふまを。臣も君を  
見る事寇讎の如くとのハ是也。又いづく君仁はまバ仁  
あらざる事あり。君義はまバ義あらざる事ありしとある。  
聖語を以てもよくあるべし。是ハ君のを得をナラズ近み志て臣  
たる者ハ君の仁不仁ふかまらざると。忠義一途ハ主用を勤む  
る。是ハ君ハ君たらず。臣ハ以て臣たるべしとの聖語あり。  
又主人の家来の非分をつくせんさくまべうらた。いづれせん  
さくまてハかへつて不和とある事あり。を得て使ふるし  
又家来の主人の非を少しも見ず。忠義全失の初ハ在すべし

○忠孝の二ツの道ハ平生ふ人のくんとす。中らふつとめよ  
の忠孝の守りを常にお放さず。いづれ惡魔もたふす也  
此歌ハ家来のせり。本尊福德安穩の根本あり。惡魔を  
拂ふの御祈禱あり。是等の奇をよよくを得て。不忠不孝ハ  
かへしもふさやうふまを。一  
叔主人といふ者ハ外目より見る時ハ。樂ふやうふまを  
其體のお大儀ある役よて。中らゆらるもむの休まる事  
あり。我身一ツでさへ世話の多き者あり。まして大勢の  
なる人のからごを頼り。其まを。其苦勞筆紙ハ  
つくろごし。よを組で考へる。家来の病氣ハ則ち

主人の病氣とある。家来が取かく奉りてを主人の恥  
とある。家来の事ハ善悪云々皆主人へかゝる者なふ。を  
配ふり。是みて万奉 索すべし。親儀不親儀云々主人  
の苦勞とある。家来たる者らの奉をよく志して。忠  
義を尽す。一

奉々ふ出る小喜樂愁の三ツの事

○一ツふ始て江戸へ来たふ玉の時親ふ離色竹馬の友ふ  
別と位馴らる古御をもるは先知らぬ。まを国へ移立の  
奉を子供をふも。親のあげきをかふし。我身の初先を  
業奉 彼是のをきひ。心の内のかふし。中々筆ふん尽し

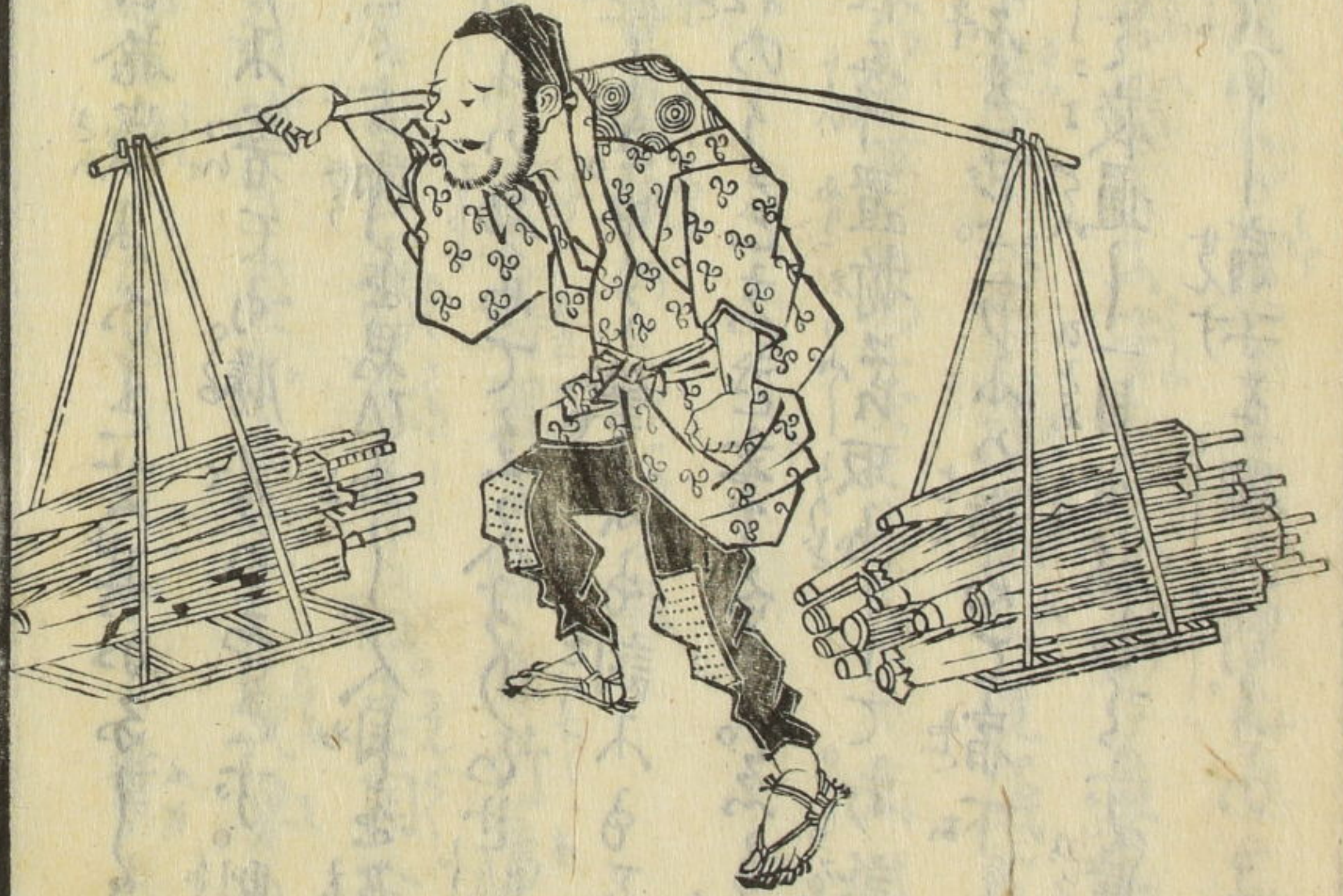
かこし。予 取仕著 四拾歳ふおま其かふし。今ふ

くまをまふ。夫より江戸ふ著ても。勝ふの志まふ。別染ハふ  
入相の位の音ふいと古御を思ひ玉し。人目を君び泪を  
まぶる事。数あらず。二ツふハ初めて主人よりいせ嶋の仕著

布子を其ひし時の様し。中々筆ふも詞ふも尽し。かこ  
し。予生きて以末是程のうま志き奉ふし。名り紙探を  
わく紙ふ色と大切ふ仕舞置折取玉取出して。お詠めて樂

む。持其様し。今ふ志まふ。二ツふハ始めて宿下りのいよ  
手へ出。一時夜より樂々夜通し。一目も秘む。大曉の比ふ  
起出て。隠仕著を著て其ひし。扇子を腰入れ。のまい。是の

紙問をのましくおりの短冊  
 紙やいろがまやこいのろ  
 うりよめるき茶種を  
 のごころす入焚茶木よ  
 虎やの五種香とのみ  
 てころふりろまちを  
 のましくとり紙  
 くまじろい古着や  
 のごころ者かろ  
 かこの古不孫古梳  
 ういとちろ



か三野を覺へむ。上野山下浅草兩國杯。元世物豆藏を見  
 物するを持入中。壯年の花見。山吉原の夜の氣色杯  
 も。此宿下りの。百分一も面白きと。思ふこと。生きてより  
 以素は。樂む程の事。ハ覺へむ。右は。樂愁の。三ハ唯産ま  
 の。俸ふまで。格別其意味厚し。此生との。俸のかふて。有たき  
 物ふま。芸。夫ハ此由。出来ぬ。事也。智と。いハ物。増え。不。是。非  
 介別の。を。起り。私。の。勝。を。思ひ。心。が。由。か。んで。く。也。た。と。介  
 仕着。を。實。ひ。て。も。二。三。年。も。た。て。が。昔。ハ。禱。拵。が。あ。ら。う。ま。い。の。  
 地。合。が。一。向。ふ。物。と。の。と。い。ハ。機。が。出。る。其。時。勿。作。ふ。い。是。ハ。主  
 人。より。下。さ。ま。と。物。を。と。思ひ。直。す。が。則。ち。已。ま。ふ。か。何。野。也。

又宿入花見。是言。負へふと。終。夏。の。時。ハ。を。や。私。が。出。る。お。ふ。  
 終。入。ハ。本。心。を。あ。ま。か。す。事。あり。本。心。を。打。ま。う。す。と  
 い。ハ。ハ。已。ま。し。理。を。舟。の。事。也。一。年。ふ。一。度。二。度。の。事。ハ。お  
 ま。を。少。し。ハ。遠。く。お。け。て。も。宜。し。か。ら。ん。其。か。と。り。ふ。平  
 生。ハ。精。出。ま。べ。と。已。ま。し。理。を。舟。て。本。心。を。失。ふ。事。あり。  
 至。て。宜。し。か。ら。ず。随。分。と。早。く。か。へ。け。て。主。人。ハ。安。堵。さ。す。所  
 一。是。大。福。徳。を。得。人。也。若。し。者。芸。篤。と。を。得。け。る。べ。し。私。の  
 身。勝。ハ。お。ふ。き。か。ら。し。ま。と。べ。し。壯。女。野。へ。終。事。一。ハ。二。ハ。人。由  
 大。ひ。ふ。ま。ろ。し。一。年。ふ。一。編。二。編。終。を。誠。の。堅。人。と。い。ハ。ひ  
 ぐ。こ。し。平。生。ハ。あ。ら。ぶ。ふ。き。人。の。内。也。ど。う。ら。く。の。内。也。大。ひ。ふ



福徳を知らず人も。一生ふへんも終るうす。さまたまは  
誠の堅人ふ志て。福徳の十分ふ来る人も。是ふよめて  
一生ふへんも終るうす。若行人のうす。大事のくくの  
我身を捨るといふ者也。を國より江戸へ世ふきか  
ら。身を放埒不持て不首尾杯のりて。相済すさずん。  
主人大事我身の大事を志して。家業不替ふごうら  
くせを。無智の悪人也。第一主人の名をけがし。己とハ  
貪乞ふんぎと食とある人も。いひかうのふい大馬鹿也  
早く在所へ附登せ土百姓ふすべし。左様ふ不覺者ふ大身  
体大金の支配へさせがごとし。その貪乞百姓ふを登り。若

江戸ふ長居せむとろき病ひを引受親兄弟ふ雜儀を  
かけ。人変りも出来がごとし。早速在所へ登りすべし。早く  
若かかうの人とあはせ世界の人ふ面目はるべうす。一切の  
若イ者。此事なをよく志。深く考へて。一生ふ一登んも  
行べうす。若一登んも終るうす。人々のを。福徳の十分ふ来  
る登り威勢も安かむ。いけて。是ぞ誠ふ家の寶國の寶  
といふべし。此の善惡勝負人々考ふ登り。定ふ一  
いひ登りかごとし。  
○拙人のいひぞやつけし芥のちと。松入をまふ雪おとある  
○ちりとりと。蟻の穴より水りりて。悪事千里の堤くす

少くもさき事を志すも。大ひある笑ひの来り。事ハ此二首  
の歌ふてよくさうらるる。

奉公人ふ三ツの不思議ある事

○哉後屋白木を伊豆藏の類店番頭並勤めぬけよ。八百兩  
宛のえい金全定り也。支替町傳馬町向の大店入大方三百兩之  
也。夫より以下の大店質屋西替屋の類ハ百兩五十兩三十兩二十  
兩其家々の格式也。是をえよとを同ト奉公みて大なる高下  
のゆるさうふえちと云。是が天道直成野也。右八百兩のえい  
を賣ひし者其ハ成程初めの内ハ花くぬ店探出しけよ  
芸大家の風儀ガ自然とうさうさう。万事大あつまふ志す。

其上大金を賣ひし奉公も最早大預成就といふか  
ふ川で。万事油断が未だて次先く小身上まらりいつし  
床も仕舞ちいさく格子倦り採ふ志す本店へは奉公  
と号て再び主人の役成とある者多し。又指支式十支の細  
えいの者其ハ中々油断志すのいけぬを。一公不敵とかせぎふ  
精をいよ。成しも奢るをふきな小次身く小。身上うくあつ  
て。子孫も繁昌し。出店小玉店を増ハ皆指支式十支の細え  
いの者の戒也。其識ハ式指支三指支小取支と身上ハ一萬兩の介  
限ある度ハ成安き道理也。八百兩のえいも入  
三千兩の身上入ふかりがとき者也。其識ハいよとよかろ八百兩の公

持をふ。万事八百兩の風が吹八百兩の氣が吹るをふ。随分とよく  
ゆり之所が一年ふ武十あう三十あうのびるうづりく一をいふ  
らでの初ぬ者也。又武格支くくの細えよの者入。百兩ふか川  
ても。やちり武格支の心持がもふもす。義理其外も。武格支の  
格ふて暮すを。段くと金限かのびる也。又千兩ふか川ても  
百兩位いの格ふて暮すをふ。忽ち金全を産で。五千兩一  
兩の身上ふあふ事入ふり安し。世間をえてまを登り大店  
より。別とくろ席ふ段くと大きくふるの希也。大方の段くと  
す不まる者も入。股引もろんちふてかせぎ出た身  
上の。吹身入榮る者也。二ツふか越後を採入向ふ店とふふ

年季奉ふ人計四百人餘りあり。夫が吹身小役ぬけ  
て。番頭ふあふ。番頭を三年勤めて退役する事也。此勤定で  
ハ今系りの者入。千四百四拾年勤でふくてハ番頭小返ぬ  
ける事入。玉末ぬ也。亦も右の内から年くごころ打。病  
を病死採ふて三四十人宛。その川が玉末て。其跡へ年く頃ぐ  
りふあふをふ。三十七八歳ふて番頭小ぬける者も入。是ハ  
運の強ひと弱ひとふあふ事也。右四百余人皆番頭まで  
ぬける氣ふて勤めける也。後ふかごころを打。病身小採  
ふ川て。運のよき人あり。此運のよきひつよふ入。耶世の  
因縁也。又ハ不食食ふもあて煩ひ。病死する者も入。是等ハ

主従心得二編上

求めて不仕合とある人も唯主人大事とつておんかせぐ人  
 の祈らずとも佛神の神守りありて運つよめるべし。  
 大方の不まゑふて身持悪ま定命迄生延る人の希也。  
 大方の半壽ふて死する者多し。たとへば三人が三十俵  
 或人杖持ふて正月より大晦日迄暮し方の出来るやうふ。  
 宛好ひ置むふ也。是則ち定命と同じ事也。其積りを  
 以てくらしむを寒くも空腹くも。年中暮すけを  
 甚不相應のむごりを志して。酒をのこ。女即を眞杯せむ。金血  
 前の内ふ一年中の宛好ひを棄ひふくまを金後より。  
 大晦日迄の暮し何れを以てせん。死するふか。あつるべしむ。

是不養生ふて死するふ同ト残念ある事也。何れも約束  
 づく杯とやス者あり。甚だ子簡遠ひ生悟りふて小人鳴  
 の巾着不どの智恵也。取ふたうす。何事も約束づくふ  
 ら誰一人特出して持ぐ者ハあつるべしむ。約束づくあつるを。  
 まくくか。あつるむ。か。かりたる金。天か。でも降そ。ふ者  
 也。然るふ三年待ても。支も。みらぬ。さ。け。り。と。り。の。ま。ふ。  
 かせげを富ふまけま。貧ふ。事。眼。前。也。あ。ら。を。  
 至小忠を尽し。親小孝を尽し。礼義正紳。身を。修。ま。家  
 業を。生。務。せ。む。天。の。福。徳。を。興。へ。む。事。疑。ひ。ふ。皆。忠  
 義孝の致し。家業を。生。務。ま。て。誰。惜。ま。ぬ。天。の。福。徳。を。得。

びの魚一。魚角忠義孝弟の心さへつきたを。一生不自由ハお  
 き者也。又一旦信を失ひて。不忠不義ある時ハ。いふやど信  
 を用ひても息引取と跡みて人參を用ゆるふひとし連も  
 取へしハ玉素ぬ者也。世時不至川て後悔すまき詮ふし此  
 用ひて信力を盡きて大切なるを致すべし。又落ぶ  
 きても。信はまを人のつとまきても深きおふ。同一負免去  
 ふがらも。大きお遠き安き場あり。是を後悔の信といふ以前  
 の不奉公を溺くと思ひおつて忠義孝弟の心を起す者  
 也。世間お後悔の信多し。三ッふハ四百人の中ふて首尾能なる  
 を勤め上て店持家持とある人ハ。漸く四五人也。其外の三百九十

五人ハいづまへ終しや知まがさし。皆思ひくのお穴へをいら  
 て世をくろくもとえへし。又死去の人も多かるべし。水の  
 流まこと人の行衛ハ換くふ者也。老人尻昔し知る人の終  
 湯志まぬを考へ見らぬし  
 ○紙問屋の志くおりハ。短冊紙や色紙中とりて賣ふおるき  
 薬種屋のどろ打ハ。焚茶倉太し虎屋の五種香とりてり  
 ふおるき。質屋の志くおりハ。お交りの紙くおかい古着屋の  
 どろろ者ハ。かろくまこの古骨古椽買と時おるき。友替やの欠落ハ  
 車力仲間へをいり。湯屋の番頭ハ。寄合止番と玉かけも皆  
 是其職くの流ふよるもおかし。各く一をふおつてうけおるき。

漸く一日九拾支の百位の利分を得て諸事万夏の賄ひ  
を志て世を渡る者多し。惜いなる。主人の居て其働きを  
致しるを余程目出度身上とあるべき。残念千万あり  
此時後悔の心を起し。悔りなくかせぐ時ハ稀に身上に  
有る者も有り。又老主人へ帰系する者も有り。又再び  
主取志て目出度身とある者有り。おそく其忠義正直  
を第一と志て一生を送るべし。又始めより所望を成し  
人ハ強く忠義を志し主人大事を忘る事なから  
さすを福徳の澤山ふ来て終末繁昌とすべし。又忠義  
正直の時ハ一切の邪魔外道寄付事なし。かりふも油

新なき衣を買物ふ来る人ふも万幸氣を存丁寧に取  
扱ふかいら来と人もよらこび。又重て来る者也別志て  
や志き下男下女杯ハ主人の買物ふも。愛相のよき所へ来  
者也。一日一文宛よけいの徳用を志て一年ハ三百六拾支  
是を以て主人の積徳を考ふ趣いたとへを鼻紙たるを  
ふと主人よりふんだんふ渡しつる物ねの冥利の考へ  
しふきつる者のふのけいも麻抹ふすの者也。又忠義我冥利  
を知つたる人の是も只の玉来ぬと大切ふす。衣ふ少し  
庶未ふすの事ふし。ちり紙一日ハ一枚宛かんりす。志  
一年ハ十八帖あり。是ふて万幸考ふべし。忠義の心を



時の色く候くふ横合事を思ひて。うのかりと志て居る  
 候ふ。かひ物ふまふ。下男杯を。え撥卜て。云食と思ひ。通  
 ら川せ杯と申す候ふ。麻相のまもり。又何の時入体  
 坊主杯を。かひ物かひと取遠へ杯志て。あらしき事も何り。  
 是忠心義心あき家の事也。忠我正直さへ。何まの勘定遠  
 ひ其外の不調法も。候ふき者也。大休年季奉々人と申す  
 者。上下あらしして。一人前一日ふ三め。宛りのけ杯を。入  
 用たらしぬ者也。十人の奉々人。一日ふ貳め。宛らしり。か  
 けて。漸く。え直段ふ。あらしで。かぬ者。余程だん。とめ。か  
 け杯を。あらしぬ者也。其まけ。か高ひ。え。の利。余其外。不時

のかり物。何れ。中て主人の徳用。かき者也。若此。兼用  
 未公のつきたる。人。主人の物とて。候ふ。も。麻末。ふ。あらし  
 ぬ。道理也。一切の奉々人。其。事。を。よく。志。て。御。主人の  
 物を。大切。入。致。し。か。げ。ひ。あらし。く。撥。失。あき。ま。し。へ。ま。と  
 登。し。是。主人の。為。を。かり。ふ。あらし。す。我。身。も。天の。眞。利。ふ  
 叶。ひ。て。福。徳。入。預。ま。と。志。て。奉。る。べし。又。よく。考。へ。て。奉。る。べし。  
 日。く。の。く。い。物。着。物。の。入。用。へ。何。所。か。ら。出。ま。す。皆。主人の。ふ  
 と。ころ。より。出。る。也。余。不。ど。り。の。け。て。差。上。杯。を。主人の。大。撥  
 也。日。く。の。働。き。ハ。我。身。の。養。ひ。也。主人の。為。ふ。候。ふ。も。あらし  
 志。志。て。皆。我。身。の。為。の。つ。と。め。也。あらし。唯。日。く。主人。も。働。て

三教心経 二巻  
 三三三



やるやうに思ひ。主人のつとめをふるそかみする人あり。是  
 何とゆふに簡う知とがごとし。日このころ物着物小きひの  
 入用ハ何所から出ます。天から降もせず地から漏もせず  
 皆主人のふところより出る也。あるをあらす。てとい物着  
 物小きひ入天ううでもあるやうに思ひ。唯出まらやうに思ひ。勤  
 働く事ハ唯主人ふをうういてやるやうに思ひ。奉公人あり。  
 不届千万とりふべし。かやうの道理を志らぬ者ハ何様の悪  
 事をせんももうりがたし。早くいともまを出すふ志か木か  
 やうに思ひ。人を間遠ひと思ふを公人ハ先我身上を持て  
 飯米小きひ着物等のいなるやうに思てふるべし。中へ出まら

物みいらず。ごふをううき。ごふ工夫志ても出まらざり。ふる  
 ふ主人のまかげふより。飯米小きひ着物共思ふ。すふく  
 らしきといふに。りがごき事也。主人の眼より見る時ハ。どの  
 位ふをたうきでいふ。えても。飯米小きひ着物の代ハ。か  
 年中ふハ。余程の且也。是でハ。盆暮の勘定からぬと。苦  
 労志てござる。あるを知らむ。志て主人ふ志らうか。働でや  
 徳用を舟ると思ひ。太平のハの字で。歩飯をたべる杯ハ。あ  
 まり不簡ふし。といふ。是ハ。考ふ。及をす。毎日く  
 目ふえて。知とたる事也。其考へも。ふ。ふ。ふ。けて居て。  
 大飯をたべる杯ハ。不届千万。上ハ。いなる。えう。子。な。人。た。る

者此道理をよく心得て。忠義一途に昼夜つとめ働くべし。  
 左すもを大飯をたべるまはまり罰にたぐる。盛うし。大飯  
 をくらふ。いさひハよやど勤めちううか孫が。かゝとま。だ  
 ○いづこの家も。子代にまけまは。主人の市用をよく  
 勤めて主人の力ふ。り。取けとある人の至例て希ふ。皆  
 ふまのけ者。そんなむく者。ふ。表て。主人も甚ど。こ。ま。り。入。ま。ふ  
 也。親町小西六兵衛の奉々人。ふ。善助。といふ。小。二。五。り。其  
 親かり。い。ふ。ハ。い。は。か。や。う。ふ。そんなむく。飛上り者。を。市。用。に。人。の。能  
 面倒を。市。用。に。ふ。さ。ま。つ。る。お。ま。は。い。は。か。ま。り。を。て。持。兼。を。て。こ  
 と。い。ふ。こ。の。事。も。千。万。也。誠。ふ。そんなむく者。ふ。相。違。ふ。し。余

ら。を。主人の所。ハ。そんなむく者。の。寄。合。不。持。者。の。寄。合。身。上  
 持。事。を。知。る。ぬ。者。の。寄。合。換。徳。善。惡。を。知。る。ぬ。者。の。寄。合。  
 ふ。ま。の。け。者。能。天。氣。者。の。寄。合。利。の。風。義。理。知。る。す。の。寄。合。  
 飛。上。り。者。金。を。ひ。た。が。る。者。の。寄。合。無。智。惡。人。の。寄。合。ふ。ま  
 を。主人も甚ど。氣。の。も。め。る。事。也。少。し。油。断。を。す。と。を。大  
 換。を。し。て。直。ふ。か。う。敷。布。か。う。藏。と。ある。誠。ふ。恐。ろ。ま。い。ぬ。ハ  
 我。子。我。の。代。ま。ふ。り。若。い。者。六。歌。仙。ふ  
 ○飛。上。る。布。め。ぞ。や。さ。う。利。の。風。う。ま。い。事。ふ。つ。い。だ。ま。さ。う。ま  
 ○拵。び。た。し。の。う。か。ま。さ。た。し。樂。ま。た。し。み。之。供。り。た。し。金。を。ひ。た。し  
 ○よ。き。事。入。ど。ろ。へ。て。邪。で。面。倒。で。小。六。う。あ。う。て。い。ま。ぐ。め。ふ。い



費入て知て人ハ大店の氣風ぬけむ。万身身ふよりおどる  
 左ふ減亡入及ぶ也。是も五百兩位のつりりふて。始め其  
 用を入て暮す。於てハ。武格友位ハ中。且老へもより舟がこ  
 一。亦と芸家ガ世の中の形勢也。武格友の人ハ。何れ道も  
 ふんぎを忘とす。入居。八百兩の人ハ。ゆふ志れ。こゝ氣ふふ  
 つ。おどるとま。うす。奢る也。八百兩のおとろへるも。武格友の  
 發昌す。も。少一のを得遠ひ也。唯奢るとおどろ。ぎるとみ。り  
 八百兩。費入て。知て人ハ。金ハ何國も。澤山。い。り。み。ま。ひ。  
 何まり。大切。ふ。せぬ。者也。又。大家の風。が。ど。も。ぬ。け。ず。ん。ト  
 ち。も。く。ぬ。も。高。ふ。ま。と。る。本。入。裁。ハ。お。と。ろ。へ。る。善。也。是。も。今。迄。の

風儀を捨て。身も心も引下り。外辱もかま。す。事。万。事。の。怪  
 小暮。一。お。を。か。す。の。ゆ。や。ま。り。ハ。有。間。鋪。入。残。念。千。万。ふ。り。悉  
 角。名。取。ら。れ。り。て。大。風。ふ。す。り。た。か。ら。ふ。よ。り。て。也。武。十。友。三。十。友  
 の。え。の。の。者。と。同。ト。す。う。思。ひ。お。を。何。ぞ。見。世。を。仕。舞。再。び  
 主人の世話。ふ。あ。し。ん。や。無。智。ふ。ま。て。未。の。事。が。え。へ。ぬ。人  
 也。能。く。考。へ。て。裁。度。ふ。き。す。う。み。す。べ。一。俟。約。賃。す。入。君子の  
 道也。大風を。や。め。て。再。道。を。行。ひ。お。へ。ぬ。さ。く。格。子。俵。り。み。ま  
 て。本。店。へ。見。舞。奉。ま。す。う。氣。ま。ひ。お。一。大。店。向。の。番。頭。尻。の  
 道理。を。よく。考。へ。於。て。店。持。入。ふ。り。ら。る。時。の。突。か。し。構。入。す。べ  
 一。大。き。い。世。話

○亦も世の中の仕事ハよくあつた也。八百兩入せんりゅう敏昌みんしょうつゝ。  
 武指ぶさし入ふところへると定さだま居いてハちいさい所ところや食たはる  
 所ところ入奉ほうふする者もの入一人もあつたまトき入。左ひだりもあつたおきてあし  
 きがひつゝき入もあつた。よき入もあつた。唯ただ其人そのひとの  
 一心いっしんの覺かく悟ご入する其その也。世の中ハまこと持もと入よくあつた者もの也。  
 上下じやうげあつたをやめ。唯ただ一心いっしん入かせくべし。おごり入を止やめて  
 入かせく者もの入。神かみ家けハ敏みん昌しょう子こ孫そん入長なが久きうあつたべし。おごり奉ほうふ入  
 たる者もの入。忠ちゆう義ぎ正せい直ちく入をよしとまて。主人しゆじんの換かへ徳とくの由よしかぬやう  
 入。諸しよ事じ万まん事じ氣き入を舟ふねて大切たいせつ入すべし。天あまの冥みやう加か入呼よひて。急いそ度ど  
 急いそ度ど吉きち事じあつたべし。亦またも入主人しゆじんの換かへ徳とく入かま入す。己おのも入

身の安樂あんらく入好このむ。己おのも入勝かちつ入む。主人しゆじんの天あま恩おん入を  
 あつた。只ただ主人しゆじん入働はたらいてやう入思おもひ入物もの着き物もの入天あまあつた。由よし  
 降くだつ入思おもひ。主人しゆじんの大おほ恩おん入をあつた。後のち入其その罰ばつが當あたつた  
 て一いっ軒けんの主しゆともあつた。所ところ入をさまよひあつた。後のち入  
 云い食き小屋こやへ入いこと。送おくつ入。風かぜの神かみ入送おくつ入こと。いふやう  
 入始はじめ末すえ也なり。入至いた極ごくといふべし。入子ことい入云い云い入  
 ○又また主人しゆじん入向むかひて入と傷いたつた。入心こころ入かま入り入り入とあつた。入  
 又また用もち事じ入て入時とき入。入あつた。入帰かへる入。入いひひ  
 惡わる事じ入り入と入。入かま入。入た入せ入用もち入



若吳凡を好む者らも其えハ師先祖の風儀ふらとぬ  
右ハ母店ハ断りヤス。いづもへふり其は越ゆと。店  
中相談の上其人を退のけ。又外の人を支配人とまると聞  
く。是よき旋也。吳凡ハ至りてまろし。髪かみのこ造つくりのし刺さ下さけ  
丹に川がこ。つづびん又ハ衣服杯きふのの吳凡編あぐ等らひまり目め立た  
ぬチ。葉はふあらぬチ。ふす魚い。一いつも世よの中ちに立た  
○たやるとて。までふ姿すがたを好むふよ。いづもすらぬ。風かぜをえぬ。人  
と此歌うたの通り。身みを持もて。武士ぶしハ武士ぶしの風かぜよし。百姓町人ひやくしやうハ  
百姓町人の風かぜがよろし。きふり。巻ま前まへ其その分ぶんハ應お志して。其家の  
旋まを守るまもる。專せん要よう也。其家の風儀ふうぎを守まもる。いまり悪わるき事こと

ハふき物也。巻ま前まへ身み分ぶん相あ應おの事ことがよき也。武士ぶしハ武士ぶしの二  
字じ。町人まちにんハ町人まちにんハ百姓ひやくしやうの二字じ。士家しけ者もの儒にう者もの其その二に字じを  
忘わすれぬ。あらぬ。あ。ハ己おのれの職しやく分ぶんの二に字じを忘わすれぬ。  
武士ぶしが町人まちにんの真ま儀ぎを致いたす。商あきひを志しす。町人まちにんが武士ぶしの  
真ま儀ぎを志しす。馬うまのり。弓ゆみを挽ひ。鞍くら打うち杯はす。ハ賊あし亡なの基もと也。  
又ハ佃あつとり苗なえ氏し新あらた田でん事こと至いたりてころり。巻ま前まへ其その家けの風かぜ  
儀ぎを志しす。あらぬ。あ。ハ己おのれの身みを大おほ事ことと思おもひ。行ゆ未ま  
安やす穩まふ。暮くさんと思おもひ。人ひとハ師し先祖せんぞの風かぜ儀ぎを守まもり。我わが儀ぎを  
志しす。事ことふらぬ。夜よ文ぶん。朝あさ夜よす。夏なつふらぬ。大おほ酒しゆ色いろ好このむ。事こと  
ふらぬ。唯ただ家いへ業わざを志しす。檢けん約やくを守まもり。少すくし由ゆ断たぬ。



おろもふまが

江列辨列の

くみくより

十二三小あるこ

どもがあみせい

江戸へむみかうみ

くらおとふが三三人

ついでいごども

のうらうんとま

五十そくも百そく

もりつていしくたき

えさせくつまてくる所





主は忠義親は孝行を致さば老人はえが年上目上の人を  
急度敬ふ。又高位高官の御人は変えて御無礼  
なきやうにすべし。又天下の換家の他法は少くも宵く  
ぼろくも。若宵く時大ひある方ひみ逢ふべし。又忠義  
孝行を専ふ。高位高官老人を敬ひ一切の疑をよく  
守る。於ては。我身の安を福徳けし入有る。右之條く  
急度相守る。急き事。所要あり

○正直の家業大事。御法度を守る心。すくみ極樂  
○御法度をまはりつもの我悪事。其初末を地ごとく。ハハハ  
此所を忘るべし。若忘るるを。一男の置とてあり

○江州勢列三列等の國より。十二三ある子供を奉ふ  
出よ。春ふもふまを。子供が三十人五十人。一野江  
へ下つてくる。四十五位の男が二三人も。居て世話を志  
て連てくる。子供のころ。五十豆も。百豆も。持て居る  
きまると。むきかへさせく。世話を志て連てくる。春ふも  
と。親組の。江戸に。まを。かへ。よとす。か  
志て。親連の。大業事也。江戸の。火事。のよく。ある。所。志。や。け  
ふ。怪。我。の。ま。ち。でも。世。孫。を。よ。い。が。と。風。の。吹。ふ。つ。け。日。が。照  
ふ。つ。け。ても。業。事。煩。ふ。事。を。か。り。也。鳥。す。の。鳴。ぬ。日。の。ま  
ま。我。子。の。事。を。思。ひ。出。さ。ぬ。日。と。て。ハ。一。日。も。ふ。い。ど。ふ。ぞ。息。災

で首尾能く出世して長きをよしがと。何所の佛神へ系留  
去ても。我身の事願ふ事志して唯我子の息災延命出  
世するやうふと。計り願ふ也。どふぞ達者でつとむるやう  
ふと。是のそ業事くして居るふり。何所其所のむすこの  
江戸へ約と直ふ死んど。何所のむすこの。越後を白木を大丸  
の番頭と追ふ川たき。辛抱かろくして。全浪をきひこえ。  
去く志して。今の何所小居る志きぬけふと評判し。又  
たましく辛抱をよく仕遂て親の賣と田地を買戻し。在所  
の家も造り直し。親達を安んず養ひて。近所近邊のやめ  
事のみきともいふるとよ。い事を聞ふつけうる。い事を聞ふ

つけ。業事煩ふ事をかき也。あるみいむすて辛抱をよく  
去て勤と去る番頭とふり一年もぶると中登りふりサア  
其年がきていつの歳日ふるふりまよとといふ。紙がまよと  
去入父母の志立続し。近所隣へふまよとす。誰聞ふとも  
いこぬ入。私等がむすこも。首尾好く出世去て。何月歳日ふり。  
去ふりまよと。ふまよとていりく。其時が来く。明日ハ  
彌く来るといふから去て兼く一家親類の氣が迎ひふり。  
母の思ふやうハ。幼少時ハ何くかすきでいり。其好る  
物が調へてふるまよとい。強飯がとき。牡丹餅も好でいり。  
去よ。是を調へてふるまよいませう。看ハ何くとむすこのよ



うまき事なり。又とある。危からず。然し涙みむせぶも道理  
千万也。人々親子の心をさへて。莫ひ泪も人情あり

○壹方へ舟の子供へ逢たはえとのと。男の苦も是也。現  
江戸の者へ娘を御屋瓊方へ御奉る。上て置。毎日でも使らる  
者ふまを。宿下り入。ふく芸よさる。ふも者也。ふも何年目  
ふ入宿下り入。と指を打て待てる。況や遠方ふも  
十年も或十年も。顔見る事もある。親達入。案事する。苦逢  
この苦也。是ハ甚十五と男の憂。又江戸ッ子ハ何所の御  
店入。勤めて居る。毎日逢ふ由ける。又使ひよ。出さ。次ふ。ふ  
より。我が家入。居る。由。同前ふ。是也。正月十六日入。八まる。七月

十六日入。八まる。と。うまの物を調へて待てる。志やふ。い。身  
等入。待ふ。も。及。を。ぬ。事。也。度。く。来。て。世。話。を。か。け。る。わ。る。二。年。や  
三年入。まる。事。ふ。る。事。と。い。ひ。そ。ふ。者。也。亦。る。右。杖。の。事  
ま。の。入。親。ハ。一。人。の。ふ。一。江戸。廣。一。と。い。へ。芸。終。ふ。る。事。更。ふ。  
申。事。事。一。是。ハ。親。の。慈。悲。ふ。志。て。逢。て。も。く。も。逢。て。ぬ。お  
也。況や。百里。二。百里。三。百里。も。隔。ち。た。る。親。達。の。事。ふ。も。逢。て  
た。か。る。も。む。千万。也。又。或。格。年。目。三。格。年。目。入。逢。事。ふ。も。逢。て  
是。程。の。焼。一。と。ハ。跡。よ。も。せ。ん。ふ。も。あ。る。べ。う。す。然。し。涙。み。む。せ  
んで。物。の。し。と。ぬ。も。道理。至。極。と。思。ふ。也。一  
○亦。る。ふ。折。角。事。方。の。所。海。山。と。へ。く。出。世。よ。来。ふ。が。ら。家。業

も身ふ志とす。不埒放蕩ふ志とく。主人の物を盗み酒をのこ。  
女郎を買採す。我身知るほどの大馬鹿者也。御主人ふ大  
擧をかけ己も貪乏の地獄へ落る。一生難儀大恥也。傍輩  
の者ふ顔合せごと。世間へせまうふ川て。世道の道ふ川  
ふふ。又主所の親達入業奉煩みて。夜の目もひらく。ふき  
悲とむらん。ふ若忠の大罪遣る。登りて。此罪をかり  
でも。生く世く貪乏難儀の種蒔也。悲るべし。恨む登り。何卒  
辛抱を致し。家業を仕替し。主人親大業を忘るべし。  
主人取さへ大事しす。むらうを。あまうらう。あまき事ふふき者  
也。何卒主所の取達ふ安をさせ。進み世の四の剛へるす。

みすべし。さきも色。其身も安穩。進み立身出世せん事疑ひなし  
○又一切の奉々人。流し一ツ尋ね度事あり。大切ふ親ふらう。是  
生色古御をふり捨て。まき方の江戸にまき事。何の爲あるや  
兼りたり。不埒ごうらくかさかき鼻を落し。ふまきこの。又  
立身出世ふまきこの。志かと兼りたり。是ハよく志まるやう  
よ真直ふらひ。まきけすべし。いひまきけハ出まきごうるべし。知ま  
たる事。ふまき。くごうらく。いまき。不埒ごうらく。鼻たきの事。な  
人。芸。江戸へ何まき。まきごうらく。いまき。事。深く考へる。是よりか  
を取直し。不埒ごうらく。まき。急度辛抱を致し。家  
業を仕替して。主家の御爲あるべし。左もまきを我身の

浄土心得二編上

三十一

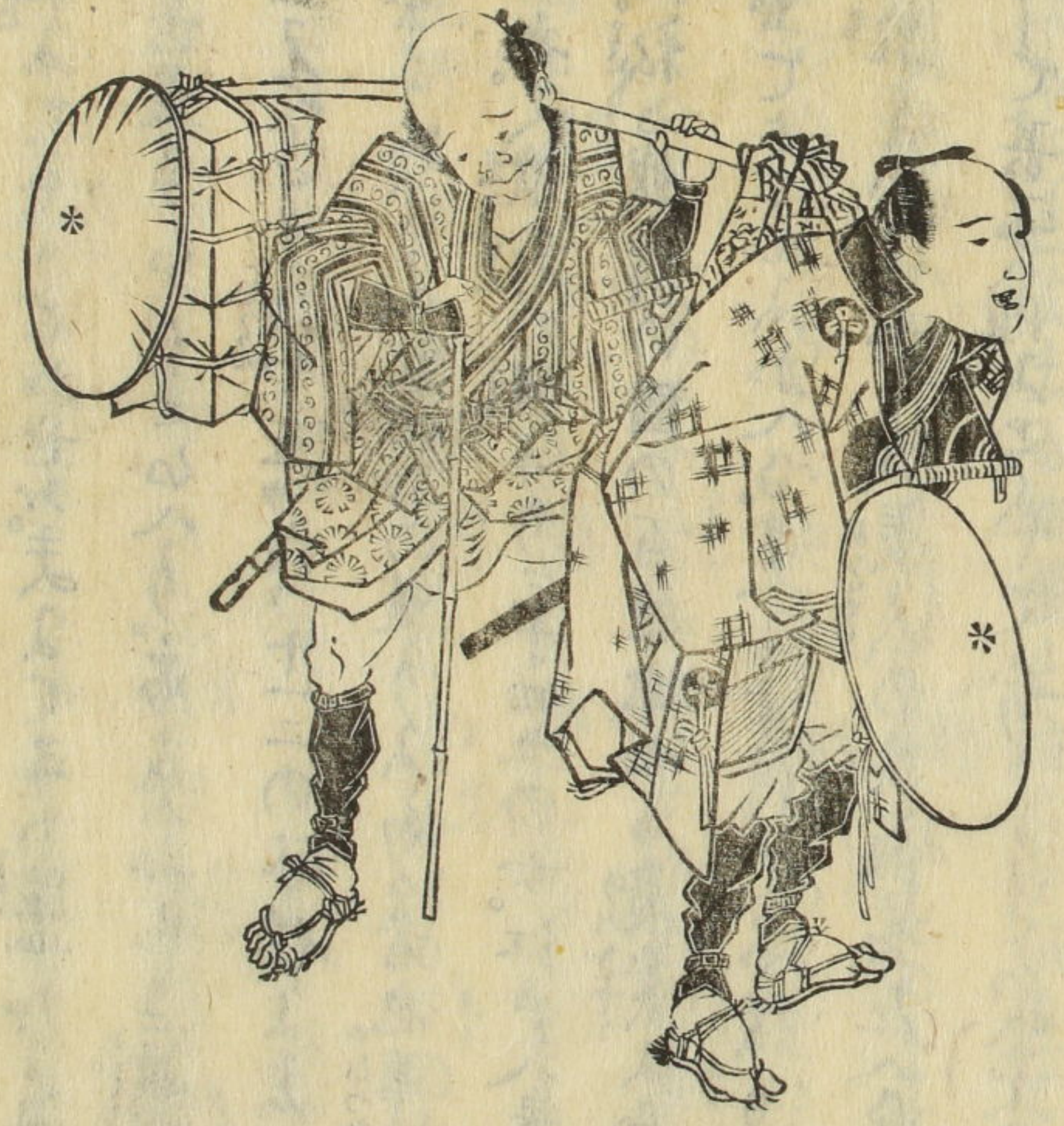
出世も其内ふらり是を主従親子目出度人とりし何卒  
 よき人とありて一家親類何卒の寄合ふも上座を志て  
 りし其の通る人とあるべし一段をより讀て深く考へべし  
 〇いろは短奇ふ為ふる事りし者いやで毒を以てが  
 う人かすきとあり是れ相違ふし中年以下の者其れ親  
 のなきひも我身の難儀とあり事も知らず何の弁もふく  
 人の飛野へともよも飛び不埒放蕩せしるし親其のりし  
 其れ今時の風なりしとぞ慶長時代の分別あり極とり入る  
 とある支連をよし人と思ひて父母の仰を以てもさるぬ  
 しく仲間がらみふし父母のりし事を以てし川す是を六ヶ

志いたびくりりてもさかごとを後入り親も退屈志てい  
 ぬやうふある又親父情袋の頭く位牌みあるかまうとぞふ  
 おけ位牌ふさへあるを此方のを任せとりし人杯を眞實の  
 友と思ひ懐むを志せむりもふし其懐むをかき所より大ひ  
 るる笑ひを引出し一生をいやする事也此れ若年の人ふ  
 り懐む事を志せし者也懐むを志る者ありあまのり大悪  
 ふさぬ者也又子懐の氣隨我終ある親が愛みおがまう  
 子を教へざるのいふより也我子といへば親の爲ふし孫あり  
 主人の爲ふし家来也此れふ禮義志つけ等をまろくく教  
 へざるは不忠不義也是れ私の本よりし事也天の命也子





たごいこく江戸へ  
 きこりおんどう  
 とおゆえ申の祈  
 りまゝと申へ。母ハ  
 まちろ糸で。寝るいと  
 どのよ。とちろまゝで。  
 むかひいいで。  
 たいめん  
 ところ







恩をあらぬ者也とあり。是も間遠なり。おごりて育てこ子  
 へ已まを高ぶり。人をあふどり。不忠不孝の事なり。未の繁  
 昌ハ覺束ふ。子ハ親のまつけよる物よまを必むなり。く  
 育ぬやうふすべし。子供ハ五ツ六ツ頃ハ十二三ハ大事也。母内ハ  
 ひとく育けぬ。十七八ハふつとから。まつけを志ても。き  
 かねとあるべし。何れも。幼少の内ハまつけハ大切也。智ハ親ハ  
 へ考へよ。子供ハ國の風所の風親のりよふ。善也。格で  
 こハ國の風所の風よ。ある者也。尾刻ハころの。大ハ猫や鶏を  
 いらと。真ハこの殺まう。まを猫や鶏ハ大をうらと。又ハ  
 小思ふ事也。あるハ江戸の大ハ猫鶏を取とり入交ふし。又猫

由鶏も大を思ふ事あり。かへつて猫がたハ飛かつて大  
 をおとす事あり。大も又猫ハ世群をきひ思ふ。風を志て  
 近く也。畜生でこハ國の風所のあり。こハふよると。こハ  
 り。況や人間ハ猶く習ふ。こハふよるとある。世間の親ハ達  
 ハ海道理ハる事。志を志つて。子供ハまつけをよく致すべし。あ  
 まりあまやか。愛愛。子供ハ福德を生く。事あり。こ  
 中人以下ハ捨育てとりふすべし。あまひやま。こハふと。  
 家ハのつて甚ど。我ハ終者とあり。大ハふま。又右人ハ子供ハ  
 三分寒く。三分ひびく。こハあま。おけを。子供ハ病ひ。こハ達  
 者ハ育つ者也。こハま。こハむ也。子供ハこハ。こハと大



女連のころいもゆるぬ者志やとりふ又向ふの方で入。こころのむ  
 すてを誘ひ出まてはのすうふどうらくふまゝ憎いかり志や  
 とらつゝ居る。支方の親がよ前のおすこのひいきむらり志や  
 居る。支方川柳が飛ぶふも。両方で連がうらひと親交のひい  
 だも向違ふ。實入ざらうも誘ひ出のせぬ。誘ひ出すは随分と  
 自分も出でてゆくよい事入の向ふ合ぬが。うらひ事入入急度  
 一人前つとまう男也。人の飛ぶ所へ。何所へ行くも飛ぶ者也。  
 他人の危をとりまて。憎い婦人入。親連の悪徒おすこのひい  
 きをわりまゝ居る。親たよけみ相違ふし。我子の悪をまゝ  
 まゝ。我子のよむが人の子のころいと計り思入て居る。大馬鹿と

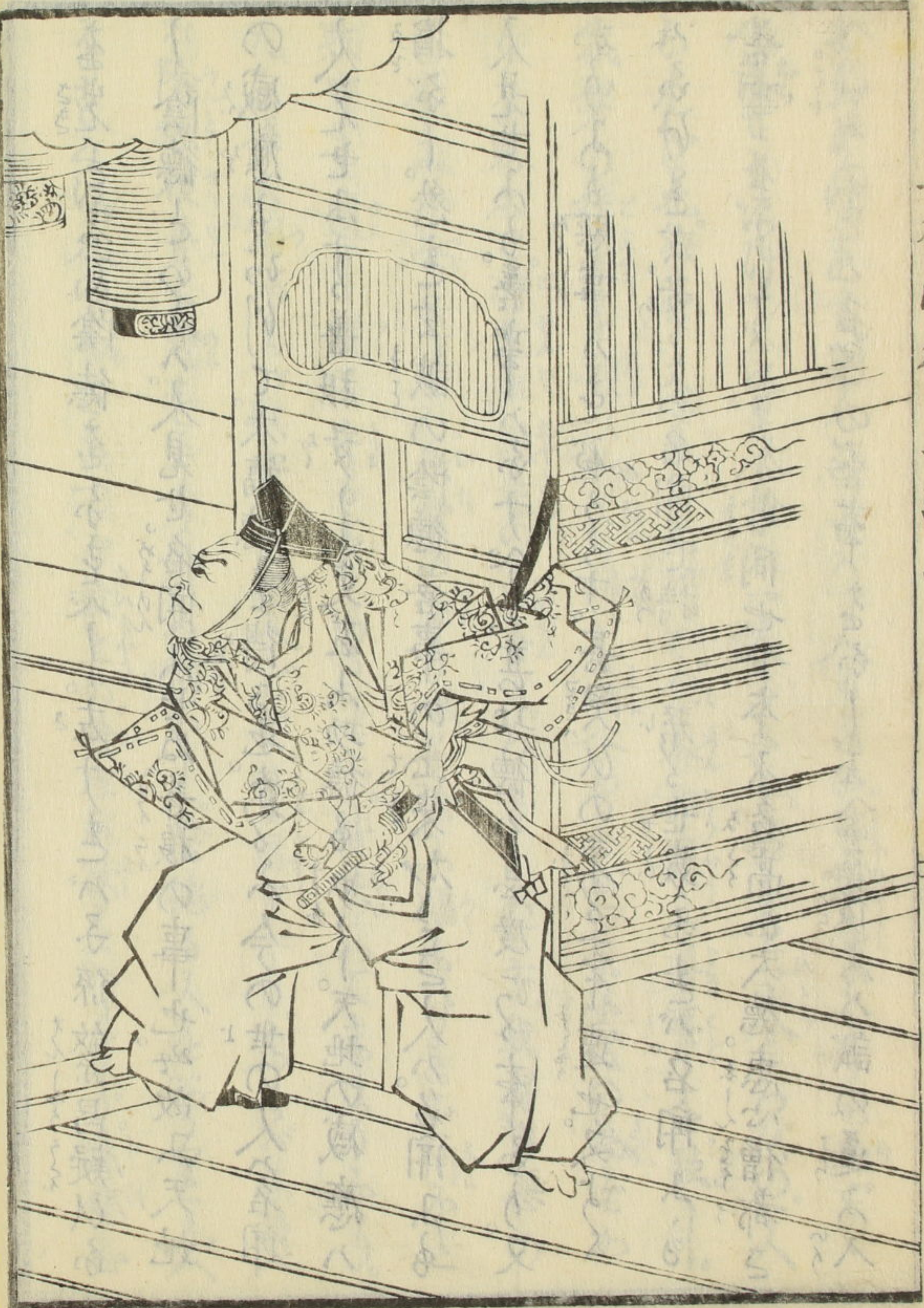
のふ。一。子入の我子をぶよりと不めるも。おやのふら不めそ  
 こふいが。母のつらりののとよ。しも相違ふ。おやの。我子の  
 けすうり。おまじべうら。我子の近所。近所の悪徒者の頭也。支方を  
 らまふ。おま入内。氣者正直者ふまて外へ出る事。も。さうし  
 ぶりと思入て居る。親たよけみ相違ふ。我子の事。おま  
 目。おまへぬ。かやうふ。盲目入て。子役の志。川柳の出来ぬ。答  
 也。おやが。智慧が。ふくて。おま。おまの。事也。きび。おま。おま  
 合。ま。して。申。く。ごう。く。く。不。埒。も。出。ま。る。者。ふ。ら。う。す。若。う。る  
 け。ま。も。早。速。追。加。して。よ。い。人。を。立。立。く。跡。を。由。り。る。是。入。入。叶  
 こ。ぬ。う。ら。ま。て。子。息。も。辛。抱。を。致。し。家。業。を。立。替。ま。て。親。の。名。跡。を

徳ありふある。是誰か仕合どや。子息の仕合也。子息の仕合なり又親の仕合也。何卒子世の志付けを以て致し。親子世の中を安んずる暮すべし。世間の親する者。必道徳あり。事すをよむあるべし。○司馬温公の如く。父さびしけむを。子功あり。父の子をさびしなくせざる。父の如やまなり也。師の嚴師教へざる。師の怠り也。師父さびしむく志て。子の覺へざる。子の科也とあり。父さびしけむを。子功あり。父の如く志つけを致すべし。志付けあり。氣隨氣終ふ育てたる。子世の親の如く苦をする。○無學でも。親がさびしむく志む。自然と親をたのせつふする。何卒惡人ふありぬ。善人ふあるなり。小育てるが親の役あり。

無勝ふ全限を満て。子ふおけり。を親の役と入のしね。唯仁義禮智信をよく守り。已ましく家業を成就す。やふも教へべし。人の物を無情ふむさぶりて。子ふ全限を澤山渡りたまふ。て。また一生遊んで居て安んずる。すとのふよめ。若親の如く計りを頼り。志むく。暮す子ありが親の如く。を失ひく。未ふふんぎす。やけあり。○樂好と親の如けり。を頼む人。食の基ひと兼く。志し。○若き時。夢の浮世と樂好む。人の長生。老の乞食。何でも家業をよく覺へく。昼夜並精志て。暮さぬ。一生を送り。が。親の如けり。をかり頼り。志む。暮す人。親の敷實を







神主のまじりくむまじり  
神勅とらつらつて、ね又  
をたむらふ。ね又いうらて  
むすこをうこんとする  
ところ



あふあふ。名聞の二字を掛物かぶものと志て拜おがみと也。况や其  
外の者もの若くは名聞の善の事也。此世界の名聞がはるあふ。  
悪事あくじをする人ひとあふ。若くは名聞がふけさへ。悪事する人  
多し。大方の名聞はるあふ。此世界の持る居る也。亦るを名  
聞とて。いまり憎むべき事ことあはらばとあるべし。名聞あし  
み誠の善事の出来入人の上吉の人也。若くは誠の善事の  
出来がとき人の上名聞あふ善事をするべし。名聞あふ善事  
をするを終つひよの誠の道みちあはらば。天禄を得る人多し。人  
考へあへ。又いげたの子もかせぎ出さず事あはらばとある。唯  
親のゆげりを頼たのむ。親の物を取とりてきつりつり計はかりする子

多し。又親のふんぎを志し申かまるとも已あむと身勝みかちり計はかり  
する子多し。又いげた子もかせぎ出さず事あはらばとある。唯  
親のゆげりを頼たのむ。親の物を取とりてきつりつり計はかりする子  
○いのこをせすふためる金銀を。子あかくさる。取とり馬鹿者  
○いさす。や。子の行末ゆきすえあはらば志めど。取とり行末ゆきすえ思おもふ子あはらば  
此等このらの通りあはらば子三鬼さんきの首くびあせ。子あさふ志らすの徑みち文  
好このとむ。親する者深く考へあへ  
○去取さるととの神主かみあり。大悪性おほあくせいの子を持もつ。甚ころふんぎあり  
女郎むすめを買かうやう。ちを打うつ。大酒吞おほいさかひのし。悪あくの事こととらふ。悪あくの  
事ことを志して。女むすめ取所とのふい悪あく子也。二親ふたごのむねあふ。釘くぎあはら  
ふ事ことあはらする。心をさめる。其そのまはとく志しる。人あは

ことな難儀ふんおろす也。今日や勘當せん。明日も勘當せん  
 と。思へま一人子のまふを。勘當を仕無く居る。又神の神利  
 生みて。悪ふも直りやせん。又又の毎朝未明に社檀入向く  
 祈りける。神の通り悪性の二子を持まして。甚どふいぎ  
 仕る。何卒神力を以て。神直下下うら生く世くの神恩あら  
 ん。夫婦まいのをかりう大脱至極ふ奉存れ。一人の事ふを。家  
 督を譲り承く宮仕へ致させ度奉存れ。何卒かまふ悪性の直りぬ  
 候よ。ひとへ願ひ奉りまきと。毎朝未明ふ糸諸を祈り  
 ける。なかの二子悪性者。母事をよく居りて。時夜の明  
 ぬ前より神殿の内へ忍びこも。父の糸諸を待所ふかの取又例

の通り悪性の二子を持まして甚ど難儀仕る。何卒善公に相  
 成り候よ。神願ひ申上りて。拍打く歸らんとす。所ふか  
 の悪性者社檀の内より。細き声ふて其方毎朝社檀へ歩を  
 をこび子息が善公ふある。まうふとの願ひをふり。其志一ふ  
 感志て。今汝ふ告をふす。信んぐ兼らま。汝が子も一旦あ  
 一かりしが。今大きよよくふりこり。早く妻を持せ家督  
 を譲り汝入隠居せよと社檀の内へ神告めを。あけとかん  
 志て。神詮宣の趣き兼知仕りま。一。早速仰せの通りふ取  
 計ひますと。りみて。ふり立所を又呼らへて。其妻の事を  
 いそげと。重くの神勅の声。いごころ。我子の悪性者ふよく

仰ぐるなふ疑がとましく思ひて。仕檀の扉を開き見ると彼  
 悪性者の仕檀の中へ二王立ふ立て居る流石の孫宜殿もびつ  
 くり仰天まふがら。已まらせがまの左門ぶあいら。神勅とい  
 つまひ。親をたをかる。不届者も討みせんと服指の柄もを  
 かける内へ透間を見ろ。飛也ーとんふ雲をかすこと。失  
 たり。已は何國迄も追うけろ。討みせんとかけせーて入ると  
 まま流石の親の事ふをを。ふがふいせぬ。まごごく悪性人  
 中へ直ぐぬ所詮跡へゆげらまぬ養子も。ひ目相續させ  
 るより外ふーと泪雨のごとくみ流してふきかふるむも道  
 理也。二親も苦勞かけをうりも。大罪也。況や神勅と偽り親

したをかる杯の壺くの不届也。世も悪性者もあまをある者也。  
 扱むまここの女房のさいとく念が入るとなふ妖の皮があら  
 くとく。既よぶ川とぎとまる所を。あぶあく。遂て大仕合。世  
 間みかすうの悪徒者が澤山みあるから。あーも油断すべから  
 ず。ごふらよの監梅も仕負せとやうみあ川とが。あまより女房の  
 事をせりとなふ。大てこずりをまゝ。妻のさいとく念をい  
 まぬと。あまふんご物を。あまよりさいとく念を入るとなふ。  
 親も用。解くまごく。既よぶ川とぎとまる所もま。あまより早く  
 とれふ命よの別条ふし。併ふから。親の方で。大仕合也。若是  
 をまろふ。身上を渡しあふ。こあまぢんよつらとてままのあで

らるるよ。悪性者の声こゑを聞き舟ふねとむくりみ。うといつたりがわくくも  
く。親おやの方かたでハ。大仕合おほしあひとふりて。是こゝぞ正直まことを守まもりあハ。神かみとし  
び。又また親達おやたちをだます子こ供たねまけを。だまさまぬやうふすべし。  
中ちゆうみも母はは親おや杯はちハ猶なほく能よたまさまるとある。び。  
○蜷川なまがわ新右衛門しんえもん扇親あふぎのちか當あたの狂きやう奇きふ。人の身みハ仲人なこうど頼たのまつまをよ  
び。子こふかろのが人の役やく也なりトよままけを。一いつ休しゆうのいづく。新右衛門  
とんふよとやうあてハ。今いま時ときの風かぜみちらぬ。狂歌きやうかをよむあしやう  
みよむべし。○仲人なこうどハ昔むかしの事ことよ。今いまの世よハ何なにもつひよりよまま  
女房にようばうト是こゝハ一いつ休しゆうのよままとこ。可よみ相あ違ちがふし。世よ間かん皆みなかくのごとく

本ほん道どうをいへむ先住せんじゆう所しよを調しらへ。飯いん米まい小こまをひの  
ひるやうみあて。まかろ何なに商しやう賣ばい何なに役やくをまろ。是こゝあろハ。女房  
子こ供たねありま。随ま分ぶんと養やしやふとまろと思おもハ所しよで。仲人なこうどを頼たのま女  
房にようばうのせんさくする。若わふふ。今いま時ときハ誰たれでもとんふ用意よういする。人  
ふし。今いまハ誰たれでもやとよみ。女房にようばうを調しらへ引ひむりこんど所  
ぶ。飯いん米まい小こまをひもへりつひも森もり野のもふいサア大おほままり後のちの野の  
へハつひもふいそしてこいあがふい。小こまをひかふい。世よの中なかがころるい  
あろまや。人ひと氣きが遠とほくまろ。あんのかのとりみて。人ひとを恨うらむ世  
を恨うらむるハ大間おほま直ちかひ也なり。えん何なにもあしたくろへあし。まやの。  
何なにがあ。物ものまや。えん貪いん食じやくの上うへみらい口くちが。ふへとわろ。二進にしんも三進さんしんも

聖隠へも由けぬ。心食するはさかむりて。銭葉入りの外  
 みる段か。又金根をきく事を知く居る。金根をきくはけ  
 幸ハ少々知るぬ。夫より後が生まてるはかへる。何で勘定が  
 合物志や。難儀十のたよりき入也。かゝる世の中がういの金  
 もいけかゝのとり入。根か葉ううはううぬ事也。世の中入  
 ろうせぬものあり考へぬ  
 ○是ハ男をりか中うる始末みあう。女も又いふはしむり  
 あり。男をり女房を早く不しからあらず。女も又男を早く  
 不しかる也。親のゆゑいふ思ひ男を悔へる。其志やうこの歌入  
 ○今時ハ仲入ふところび合我もいふあそらうつけ。世の中と

此歌よりみる時ハ男をり不埒みあう。女も甚ど不埒也  
 是ハ男より由。大膽不届みあう。女ハ猶更たふむべき也  
 又仲人あし女房を引むりこむ男ハえより論あし。又仲人あ  
 一みる女もうづら者也。實ハ両方其いふトあしの寄合かり  
 魚川ついのりも。先ハ女房といハ男と。我もいふあそらう。女  
 と寄合と身緒を持こから。飯米も小きもふい苦也。よい相談  
 ハ生まぬ苦也。よい相談むりするをい世の中らせぬとあふ  
 一よい事ハ女も知らずみる事ハかり知く居る。貧乏ふ  
 んぎのたよりまへあり。盆子いよう。丈夫生まこことまが為入空  
 ひろん事ハ願ふ女子生まこことまが為入家ひろん事ハ願ふ

父母の心皆是なり。然るに父母の命媒始の言を待たずして。穴隙を鑽て。相窺ひ牆を踰る。相従ふ時。父母國人皆こまを賤志むことあり。母公の親連の丈夫が生まると。是よりい女房を持せしと願ふ也。又女子が生まると。こまよりい男が持せしと願ふ也。是ははらげまの親也。此通りあり誰もこまよりい女房を持そふ。こまよりいまを持そふと。男の親一人もふい。皆よりい女房を持そふ。よいまを持そふと。男の親連はうり也。そまをこま親連の誰がよかろふと考へ入るるをまを居あふ。是よりい親連の思百次才ふまを居るが福徳安かの道也。其道よまを父母の勿論一家一門開ふと人か不れまする。然るに父母の仰せを待す

仲人かこま穴を掘り垣をこへる。忍び女。忍ひ男を撮る時。父母の勿論一家一門國中の者町内の者近も知ひいやまむといふ事也。是よりい親連の思召ふ従ひ父母のよんで下さるる女房を持べし。男子も女子も福徳安かの父母の仰せに随ふありとまを。聖人の仰せも是よりい女房に遠く深く信まると。信まると。あるふ今の若い者も父母の仰せに女房に随ふと。已まると。女を引たりと。女房よまを。初末のよかろふを。父母の目を見せたる。其報ひ身の跡もえへぬらや。子早ある神も。道よみの間みか。よく覺へたり



うらだるの女房ども四五人  
 よりいひと、いふと、いふも。  
 そしりむあしをまじ  
 一人の女房がいのよ、  
 おまへの向あのかま  
 のありん、大ききま  
 りごぼのくまの  
 の大ききまありん、  
 むごことかみい、  
 時ふ女のまありの、大  
 き、かみまあせたるあり  
 し、あしとこといへむ二人の  
 女房たるまありの、うら



あまのまをまじこの  
 いへも、うらとあじ  
 めとみたるあがみいと、  
 ののけうごづきかうら  
 うらとあがし、まじこの、女の  
 つうごころとこあまがらの  
 いままをりのくたるありと  
 りん、又女のまありの、大ききくあま  
 と、たるあ、似、く、り、あ、よ、たるあり  
 と、も、り、あ、ま、う、る、み、自、か、く、の、ま、さ、り、ま、う  
 の、た、る、あ、り、を、ま、た、る、へ、い、げ、と、い、は、と、の、う、ま、ま  
 へ、た、る、あ、り、ま、ど、ご、い、み、大、き、ま、り、ま、う、け、ん、ち、ち、あ、り、  
 人、の、あ、り、る、ま、ま、あ、り、ま、あ、り、を、せ、と、り、ま、ま、う、あ、こ、こ、を  
 ち、ま、ま、べ、い、と、い、み、ま、ま、あ、り、





寄合と。あるとあるもの誹り咄しをす。一人の女房が  
み入。おまへのおとありの娘めもモウせ七八でもござりませう  
み。今よ嫁入口のふい入。ろくろ首でもござりますかといへむ  
大方其らういの事さといへむ。二度目のもあし入。ろくろ首  
おやげふといへ入。何サろくろ首でも何でもふい。器量  
のよい娘め也此むすめ。堅い女を。下ふ所へよめいりて  
へあらぬ。二度三度よめいりおとくハ濟ぬといへむ。ふまを。た  
こひ婿とくらす。夫入。かまよぬ。實体。男の所とふて  
行ぬと見合せと居るの表や。外の女のやう入。男が成く頼むと  
直入。かむりを。堅入。ふる女入。ろくろ首。實体。男でふくろく入

相談せぬといへ。真女あり。夫入。よめいりを。え合せと居る  
の表や。あるとあるもの誹り咄しをす。一人の女房が  
み入。おまへのおとありの娘めもモウせ七八でもござりませう  
み。今よ嫁入口のふい入。ろくろ首でもござりますかといへむ  
大方其らういの事さといへむ。二度目のもあし入。ろくろ首  
おやげふといへ入。何サろくろ首でも何でもふい。器量  
のよい娘め也此むすめ。堅い女を。下ふ所へよめいりて  
へあらぬ。二度三度よめいりおとくハ濟ぬといへむ。ふまを。た  
こひ婿とくらす。夫入。かまよぬ。實体。男の所とふて  
行ぬと見合せと居るの表や。外の女のやう入。男が成く頼むと  
直入。かむりを。堅入。ふる女入。ろくろ首。實体。男でふくろく入

まをするも世の中又一人の女房の吐すを聞かば、よしらへ出来合の  
夫婦ふしと。中のよい若ふと云ふ、少ともよくふむ人の  
する事、私かふむまむ。私する事、人のかふむま  
常みけん、まむりしと居る。今で夫夫婦ら、事、  
しもふし、毎日かま合とむり暮しと居る。何の因果  
で、か人とも夫婦ふむ、とどと恨と泪と吐とを聞て  
居る。氣の毒、思ひま、夫婦かけむ、水ゆらすの中  
ふむか、合のあ、苦かひま。夫ふむか、合、況や其外  
の寄合人、見ま、櫛か、合、苦也、扱又出来合の夫婦と  
の、事、終、聞、事、道、具、物、牡丹餅、あ、出来合

と、い、事、あ、ま、夫、婦、い、出、来、合、の、あ、事、終、入、聞、と  
事、あ、是、か、い、か、と、能、考、へ、と、い、へ、川、つ、い、か  
も、い、女、房、と、い、男、と、我、い、か、齒、む、女、と、寄、合、と  
夫婦とふむ、と、い、と、い、夫、婦、い、出、来、合、あ、と、い、ハ、其、時  
始、聞、たり、長、生、す、ま、い、い、夏、も、き、く、者、也、夫、婦、の、事  
人間、一、生、い、い、大、礼、か、ま、を、親、連、相、談、の、上、嫌、人、と、以、て  
縁、祖、を、致、し、夫、婦、と、あ、か、人間、大、事、の、道、也、あ、親、の、御、を  
待、ま、し、て、私、い、夫、婦、約、束、す、ハ、大、ひ、あ、い、や、ま、り、也、天、祿、を、落  
し、一、生、貧、乏、難、儀、す、也、急、度、性、と、い、近、来、入、仲、人、か、い、の、出、来  
合、の、夫、婦、ま、く、ま、く、人間、一、生、い、い、大、礼、も、大、ひ、い、安、賣、入



いくたびもかんぐく。急度思ひ定めし事も。明日ふあつと。か  
 りとおろる。母をのろろふもこまるま也。心のかうろ。人々眞實  
 のふい人あり。素の頼ふふらぬ人也。京二条の木底とらふ女が  
 男の心のかうりたるを眼みてよとくる歌ふ。蟬の團ふらとくる  
 馬はつふとま。二まうこかけし人たのゆり。とよとまも。間遠ふし。  
 世の中にかやうふ人。すけとを。よく心得く。変わるべし。今の出来合  
 の主婦のやうふ。おまへへの心と。私しむと。合せく。えと。と。ま。つ。り。  
 やん。ら。り。よく。い。は。し。と。と。ま。ま。り。奇。を。ま。く。と。や。う。ふ。件。人。の。  
 の。ま。婦。は。か。く。の。ご。と。く。の。け。ん。ら。と。口。論。は。り。況。や。其。外。の。奇。合。  
 人。且。傍。輩。同。士。の。押。舟。支。婦。の。我。他。彼。女。の。苦。と。あ。る。べ。し。一。生。の。内。

みる色くふ事。いを。まひ。よ。極。忍。を。し。辛。抱。を。ま。く。中。の。う。  
 暮すべし。ふし。身。勝。は。我。後。を。せ。し。唯。人。の。為。ふ。あ。る。か。う。ふ。す。べ。し。  
 主人の家素の初末を思ひ。一軒の主とあるやうふ。せんと思ふべし。  
 家素へ主人の御為ふ。さへふと。我。身。の。上。の。事。へ。あ。し。も。か。ま。へ。  
 ぬ。と。ら。ふ。氣。ふ。ふ。り。主。人。大。事。を。忘。る。危。か。く。事。主。人。の。御。用。を。  
 よくつとめ。か。を。よ。い。家。素。ま。や。と。人。ふ。も。不。め。く。ま。て。よ。い。出。  
 せ。を。す。べ。し。又。ま。と。ハ。女。房。の。為。を。思。ひ。女。房。を。い。く。ま。る。は。女。房。  
 へ。夫。の。為。を。思。ひ。我。身。の。事。へ。あ。と。へ。ま。ま。し。又。と。の。苦。勞。を。助。  
 く。べ。し。親。子。の。心。を。ま。ま。る。近。身。勝。は。身。び。ら。さ。を。や。め。く。唯。人。  
 の。為。ふ。よ。か。く。ん。事。を。思。ふ。危。し。人。の。障。り。と。あ。る。事。へ。改。て。

せぬやうにすべし。左をまが自然との不<sup>あ</sup>相持とるゆいで。ま  
 ひふ世を安心よろしくす也。我<sup>わが</sup>こへのけまむ。人の事にかま  
 らぬとのゆの中うか心を持<sup>も</sup>て盛<sup>さか</sup>るるす。是入損<sup>とん</sup>のゆ<sup>ゆ</sup>益<sup>えき</sup>子<sup>こ</sup>  
 丈<sup>さ</sup>故<sup>こ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>神<sup>しん</sup>聖<sup>せい</sup>人<sup>にん</sup>入<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>志<sup>し</sup>志<sup>し</sup>く<sup>く</sup>あき<sup>あき</sup>脚<sup>あし</sup>心<sup>こころ</sup>ふり。此<sup>こゝ</sup>儀<sup>ぎ</sup>を<sup>を</sup>よく<sup>よく</sup>志<sup>し</sup>つ  
 る。まひふ中<sup>ちゆう</sup>よく<sup>よく</sup>暮<sup>く</sup>す<sup>す</sup>盛<sup>さか</sup>る<sup>る</sup>。主<sup>しゆ</sup>從<sup>じゆう</sup>親<sup>しん</sup>子<sup>し</sup>兄<sup>けい</sup>弟<sup>てい</sup>才<sup>さい</sup>丈<sup>さ</sup>婦<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>不<sup>あ</sup>相  
 持<sup>あひまひ</sup>す<sup>す</sup>盛<sup>さか</sup>る<sup>る</sup>。まひふ中<sup>ちゆう</sup>よく<sup>よく</sup>暮<sup>く</sup>す<sup>す</sup>と<sup>と</sup>不<sup>あ</sup>ど。安<sup>あん</sup>心<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>福<sup>ふく</sup>徳<sup>とく</sup>入<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>  
 して<sup>して</sup>志<sup>し</sup>つ<sup>つ</sup>べし。

主從心得章後篇

上終



